

「私たちがケアについて語り合い共に考える場」についての研究 ーケアの倫理とオートエスノグラフィー

大阪府立大学 人間社会システム科学研究科
人間社会学専攻 博士後期課程 鈴木ちひろ

■目的と研究概要

少子高齢化が進む中、ケアの不足は最大の課題である。全ての人々が共生し支え合う社会の構築は必須であり、そのためには、社会システムや制度を考察するマクロな視点（＝普遍性）と、ケア者、被ケア者ら当事者の「生の経験（＝lived experience）」や実践知に基づくミクロな視点（＝個別性）の両方を架橋する、「私たちが語り合い共に考える場」が必要である。

本研究は、上記課題に対して、①ケアの倫理、②オートエスノグラフィー、③「私たち」とは誰か、④私たちがケアについて語り合い共に考える場、の4つのキーワードをベースに、研究会、国内・国際学会への参加、調査、フィールドワークなどの活動を通じて、研究を「記述からコミュニケーションへ」（Ellis&Bochner2000=2006）と変質させる、オートエスノグラフィーとして、実践していく。

◆①ケアの倫理

分離と自律を基礎とする市場の生産における権利の視点ではなく、ケア関係（依存関係）のつながりを中心に据えた、すべての人を取りこぼすことなく共生するための倫理

	ケアの倫理：責任	正義の倫理：権利
①自己概念	・倫理的自己と関係的自己（ノディングス） ・つながりを通して定義される自己（ギリガン）	・自律的自己 ・分離を通して定義される自己
②普遍/個別	・文脈性、個別性、状況の特殊性	・普遍性
③倫理の基礎	・共感	・理性

2. ケアの倫理 まとめ

関係性の網の目の中にある自己	①誰が参加できるのか（主体、対象の範囲）
倫理的自己	主体を、分離による「自律」ではなく、ケア関係のつながりの中にあるものとして見ることで、意思を表示することの出来ない人や自然などの人間以外のものを、倫理の主体、もしくは対象に入れる。
関係的自己	
他者と自己への責任	②どうやって参加するか（方法、言語、媒体）
制御不可能な他者によってある自己	・客観性、普遍性、合理性によって捨象されてきた「声」を、個別性、文脈性を重視し、共感によって聴きとる。 ・他者の身体が存在から「声」を聴き取る。
共感を倫理の基礎とする	
心配り	
個別性、文脈性	③どんな場所が必要か（場所）
道徳/政治、理性/感情、公/私境界線を変革する	・ケアを中心とした新しい民主主義の場 ・ミクロ視点に基づく経験を語り合える場
正義の第三原理：依存関係の質の潜在能力を平等化	
ドゥーリア：ケアする人をケアする	
ケアと正義の倫理のせめぎあう討論の場としての「コーラ」	

「ケアの倫理とオートエスノグラフィー」
（第2回共生学会、ラウンドテーブル「共生学はいかにして（不）可能か」発表資料）

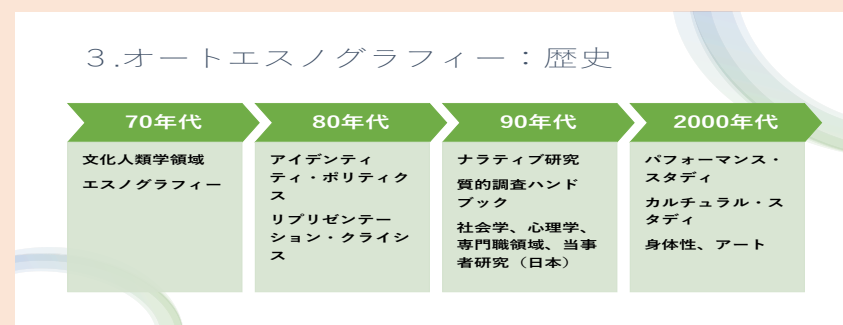
文献：
藤田結子編(2013)『現代エスノグラフィー』、親曜社
Ellis, C., & Bochner, A., P. (2000). Autoethnography, Personal, Narrative, Reflexivity. In Denzin, K. & Lincoln, Y. (Eds.), Autoethnography: The SAGE Handbook of Qualitative Research (2nd ed., pp733-768). SAGE Publications.

■今後について

- ・博士論文は、知的障害のある子どもの母親へのインタビューの分析から、ケアの倫理における関係的自己について、「ドゥーリア」の概念に着目し、分析をしていく予定である。
- ・オートエスノグラフィと「語り合い共に考える場」については、学外の研究グループや学会のワーキンググループ、海外研究者との交流を通じて、**当事者や実践の場の言葉と、学術の言葉を架橋する場を作り出すための実践的な活動を、**継続していく。

◆②オートエスノグラフィー

調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法」(藤田 2013:104)



3. オートエスノグラフィー：まとめ

内側からの視点、当事者本人の言葉	①誰が参加できるのか（主体、対象の範囲）
リフレクシビリティ	・当事者本人の経験と言葉を重視
バルネラビリティ	・バルネラビリティ（弱さ）とリフレクシビリティ（省察）によって、自分自身の中にある、ポリフォニックな声聴くことで、声なき他者の声聴く
脱中心化	
多声性（ポリフォニックな記述）	②どうやって参加するか（方法、言語、媒体）
記述からコミュニケーションへ	・抽象的、普遍的な理論や言語による記述だけではなく、詩やパフォーマンス、アートなど様々な形態によるコミュニケーションによって、対話と理解を深め、自らの身体が存在によって社会に繋ぐ
身体性：身体を使ったアートやパフォーマンス	
“evocative”（想起的）な語り	
ジャンルの曖昧さ	③どんな場所が必要か（場所）
二分法の境界線を行き来する	・理論と実践、言語と芸術、精神と身体などの境界を行き来できる場

1. はじめに

◆「共生学はいかにして（不）可能か」という問いに、ケアの倫理とオートエスノグラフィー（AE）についての本報告はどうか貢献できるか

▶「共生の技法（川本2022）」をみんなで考える

①誰が参加できるのか（主体、対象の範囲）

▷「正常な成人」だけのものか

▷参加できない人（もの）はどうするか

▷「記述」からコミュニケーションへ

▷「記述」からコミュニケーションへ

▷「記述」からコミュニケーションへ

▷「記述」からコミュニケーションへ

ケアの倫理：
・責任の倫理（ギリガン、品川）
・共感による理解（ギリガン）
・権利の倫理、関係性倫理（ノディングス）
・依存関係の質の潜在能力の平等（キテイ）

・他者があることによって生まれている（立花 1997）
・多様な表現方法：アート、パフォーマンス
・「私」は私たちに成れるか

ケアの倫理：
・ケアと正義のせめぎあう討論の場

オートエスノグラフィー：
・学術/実践、個別/普遍の問を行き来する
・Holman Jones 2011

・International Conference of Autoethnography 2023

◆③「私たち」とは誰か、④私たちがケアについて語り合い学び合う場とは に関連した、発表や調査活動

1. 「私たち」とは誰か（ISAN 2022⁽¹⁾ パネル発表）

他大学との研究グループ（「自己と質的研究会」）のメンバーとして、ISAN 2022に参加。“Who is Tojisha?”（当事者とは誰か？）について、ビジュアル・ナラティブ（山田2017）を応用し、写真や絵を用いた語り合いや、共同詩の制作を行った。参加メンバーの「当事者」概念が再構築され、個としての「私」が「私たち」になっていくプロセスを発表した。

2. 「私」と「あなた」は「私たち」になれるか（ICAE 2022⁽²⁾ パネル発表）

ISAN2022に続き、「自己と質的研究会」のパネルメンバーとして、「私とあなたは私たちに成れるか」というテーマで、犬と人間との共生についてのプレゼンテーション動画を発表した。人間が動物を一方的に「私たち」と呼ぶことは、他者の他者性を一方的に我有化することと紙一重であることに関するリフレクションを発表した。

3. The Relational Self Generated by Caring Experience and Collaborative autoethnography(ケア経験とAEによって生成される関係的倫理)（ISAN 2023 個人発表）

「ケアの倫理」と、AEのrelational ethics⁽³⁾には、類似点が多くある。AEとフェミニズムとの強い関連性のためである。自身のケア経験と協働AEの経験、過去のAE作品との対話によるリフレクションから、その価値を考察し、発表した。

4. “Milieu of Care”(パネル発表)

Writing Haiku, Sharing memories: Collaborative Autoethnography with my Grandmother（俳句と思い出：私の祖母との協働AE）（個人発表）（ICAE2023 現地参加）

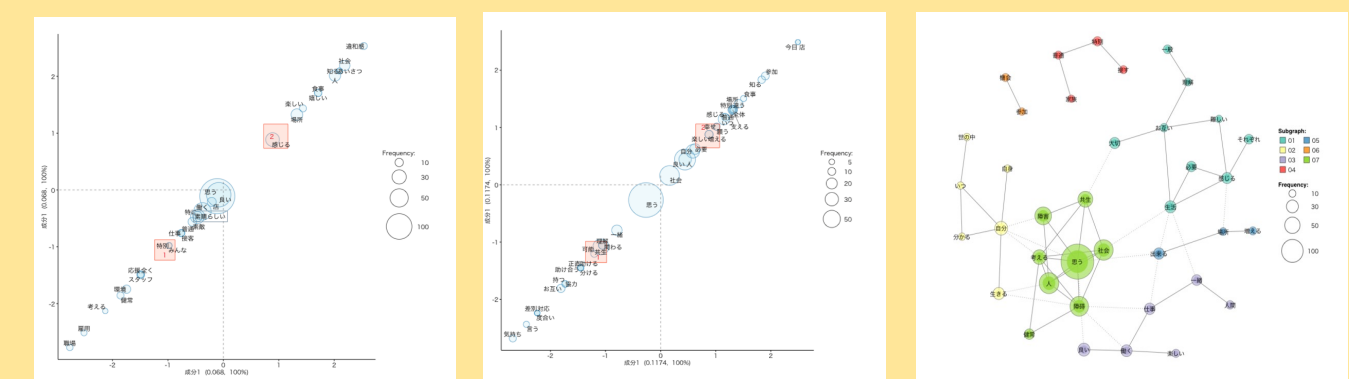
7月に開かれたICAE2023に現地参加し、「ケアの場」をテーマにした「自己と質的研究会」のパネル発表と、祖母の遺した俳句に返答の俳句を詠む形式での協働AEを、個人発表として行った。ケアとAEに共通する、「共感」の重要性について、リズムや音声、その場にある「身体」の力についての気づきを、参加者たちと共有した。

なお、このカンファレンスの場で知り合った参加者を、11月のイギリス短期留学の際に再訪し、レクチャーを見学したり、インタビューやフィールドワークを行っている。



5. 障害者の就労継続支援施設におけるアンケート調査（第2回共生学会で発表、論文投稿：査読中）

ケアに関連し、障害者就労支援施設（レストラン）の利用客を対象としたアンケート調査を実施した。量的分析及びKHコーダーを使った計量テキスト分析を行なった。結果として、利用客の多くが障害者の就労に対して肯定的だが、基盤となる認識は多様であり、障害者を応援しようという意図の記述にも、意図に反して、能力主義的な価値観が入り込むこと、などが明らかになった。



6. 知的障害のある子どもの母親へのインタビュー調査（現在調査中）

知的障害のある子どもの母親を対象としたインタビューから、「ケアの倫理」の重要概念である「関係的自己」や「ドゥーリア」⁽³⁾がどう形成されたか、そのプロセスや本人にとっての意味、それらの形成に役立った支援サービスなどを分析する。

7. 知的障害のある子どもの母親との協働AE（ISAN2024（2024年3月、個人発表予定）

知的障害のある子どもの母親へのインタビューとともに、調査やフィールドワーク、就労経験などの実践的な活動と、研究を行き来する中で、調査者である自身が、ケア関係を支える人々を支える立場（＝実践者、研究者、生活者）とし、てケア関係の「ドゥーリア」の中に加わっていくプロセスのリフレクションを、調査協力者との協働AEとして発表する。

注釈：

- (1) International Symposium on Autoethnography and Narratives（アメリカのオンライン国際シンポジウム）
- (2) International Conference of Autoethnography（イギリスの国際カンファレンス。2022はオンライン参加、2023は現地参加）
- (3) キテイによって提唱された、ドゥーリア：ケアする人をケアするという、ケアのケアの互酬的關係原理。右図、Kittay2001 参照。

文献：

やまだようこ(2017)「ビジュアル・ナラティブ-時間概念を問う」『こころの科学とエビステモロジー』創刊準備号
Kittay,E.F. (2001), “Feminist Public Ethic of Care Meets he New Communitarian Family Policy”, *Chicago Journals*, The University of Chicago Press, Chicago.

